

青い時計台

小川未明

青空文庫

さよ子は毎日、晩方になりますと、二階の欄干によりかかって、外の景色をながめることが好きでありました。目のさめるような青葉に、風が当たって、海色をした空に星の光が見えてくると、遠く町の燈火が、乳色のもやのうちから、ちらちらとひらめいてきました。

すると毎日、その時分になると、遠い町の方にあたって、なんともいえないよい音色が聞こえてきました。さよ子は、その音色に耳を澄ましました。

「なんの音色だろう。どこから聞こえてくるのだろう。」

と、独り言をして、いつまでも聞いていますと、そのうちに日がまったく暮れてしまつて、広い地上が夜の色に包まれて、だんだん星の光がさえてくる時分になると、いつともなしに、その音色はかすかになつて、消えてしまふのでありました。

また明るる日の晩方になりますと、その音が聞こえてきました。その音は、にぎやかな感じのするうちに、悲しいところがありました。そして、そのほかのいろいろの音色か

ら、独り離れていて、歌をうたっているように思われました。で、ここまで聞こえてくるには、いろいろのところを歩き、また抜けたりしてきたのであります。町の方には電車の音がしたり、また汽車の笛の音などもしているものであります。

さよ子は、よい音色の起ころとところへ、いつてみたいと思いました。けれども、まだ年もゆかないのに、そんな遠いところまで、しかも晩方から出かけていくのが恐ろしくて、ついにゆく気になれなかつたのでありますが、ある日のこと、あまり遅くならないうちに、急いでいつてみてしようと、ついに出かけたのであります。

二一

さよ子は、草原の中につづいている小径の上にあたらずんでは、幾たびとなく耳を傾けました。西の方の空には、日が沈んだ後の雲がほんのりとうす赤かつた。さよ子は、電車の往來しているにぎやかな町にきましたときに、そのあたりの騒がしさのために、よい音色を聞きもろしてしまいました。これではいけないと思つて、ふたたび静かなところに出て耳を澄ましますと、またはつきりと、よい音が聞こえてきましたから、今度は、

その音おとのする方ほうへずんずん歩あるいていきました。いつしか日ひはまったく暮くれてしまつて、空そらには月つきがで出でました。

さよ子は、かつて、きたことのないような町まちに出でました。西洋せいようふうの建たて物ものがならんでいて、通とおりには、柳やなぎの木きなどが植うわつていました。けれども、なんとなく静しずかな町まちでありました。

さよ子はその街まちの中なかを歩あるいてきますと、目めの前まえに高たかい建たて物ものがありました。それは時計とけい計だいで、塔とうの上うへに大おおきな時計とけいがあつて、その時計とけいのガラスに月つきの光ひかりがさして、その時計とけいが真まつ青さおに見みえていました。下したには窓まどがあつて、一つのガラス窓まどの中なかには、それは美しいものばかりがならべてありました。金銀きんぎんの時計とけいや、指輪ゆびわや、赤あか・青あお・紫むらさき、いろいろの色いろの宝石ほうせきが星ほしのように輝かがやいていました。また一つの窓まどからは、うすい桃色ももいろの光線こうせんがもれて、路みちに落おちて敷石しきいしの上うへを彩いろどっていました。よい音色ねいろは、この家いえの中なかから聞きこえてきたのであります。

さよ子は、家いえの中なかにぎやかで、春はるのような気持きもちがしましたから、どんなようすであらうと思おもつて、その窓まどの際きわに寄より添そつて、そこにあつた石いしを踏ふみ台だいにして、その上うへに小ちいさな体からだを支ささえて中なかをのぞいてみました。

へやの中はきれいに飾つてあります。大きなランプがともつて、うす赤いガラスの花がさが懸かつています。

そこに大きなテーブルが置いてあつて、水晶で造つたかと思われるようなびんには、燃えるような真つ赤なチューリップの花や、香りの高い、白いばらの花などがいけてありました。テーブルに向かつて、ひげの白いじいさんが安楽いすに腰かけています。かたわらには三人の美しい姉妹の娘らがいて、一人は大きなピアノを弾き、一人はマンドリンを鳴らし、一人はなにか高い声で歌つていました。それが歌い終わると、にぎやかな笑い声が起こつて楽しそうにみんなが話をしていきます。じいさんは喜んで、笑い顔をして目を細くして、三人の娘らの顔を見比べているようでありました。

三

さよ子は、この世間にも、楽しい美しい家庭があるものだと思います。あまり遅くならないうちに帰らなければならぬと思つて、窓ぎわを離れてから振り向くと、高い、青い時計台には流るるような月光がさしています。そして町を離れて、野原の細道をた

どる時分にはまた、彼のよい音色が、いろいろの物音の間をくぐり抜けてくるように、遠く町の方から聞こえてきました。

その翌日から、さよ子は二階の欄干に出て、このよい音色に耳を傾けたときには、ああやはりいまごろは、あの青い時計台の下で、あの親孝行の娘らが、ああして、ピアノを鳴らしたり、歌をうたったり、マンドリンを弾いたりして、年老った父親を慰めているのだらうと思いました。そして、美しく飾りたてたへやのようすなどを目に描きました。

ある日のことであります。毎日のように町の方から聞こえてくるよい音色が、ひじょうに悲しみを帯びて聞こえてきましたので、さよ子はどうしたことかと思つて、ついまたそこまでいつてみる気になりました。

さよ子は、今度は路を迷わずに、その町にすることができました。月はすこし欠けていましたけれども、やはり流るるような青い青い光は、時計台を照らして、高い塔が夜の空にそびえているのを見ました。さよ子は例の窓のところに来て、石の上に立つてのぞきますと、へやのようすにすこしも変わりがなかったけれど、大きなテーブルのそばのベッドの上には、年老った娘らの父親が横たわっていました。三人の娘らは、当時のように

笑いもせず、いずれも心配しんぱい。そんな顔かおつきをしていました。やがて父親ちちおやは、なにかいって金庫きんこの方ほうを指ゆびさしました。するといちばん年としうえ上の娘むすめが、その金庫きんこの方ほうに歩いていて、そのとびらを開あけました。そして中なかから、たくさんの金貨きんかを盛もった箱はこを、父親ちちおやのねているまくらもとに持もつてきました。父親ちちおやはなにかいつていましたが、やがて半分はんぶんばかり床とこの中なかから体からだを起おこして、やせた手てでその金貨きんかを三人にんの娘むすめらに分わけてやりました。

この光景こうけいを見みたさよ子は、なんとなく悲かなしくなりました。そして家いえへ帰かえる路みちすがら、自分じぶんもいつかお父とうさんや、お母かあさんに別わかれなければならぬ日ひがあるのであるのとおもいました。

四

あいかかわらず、その後ごごも、町まちの方ほうからは聞き慣なれたよい音色ねいろが聞こえてきました。乳ちちい色の天あまの川がわが、ほのぼのと夢ゆめのように空そらを流ながれています。星ほしは真珠しんじゆのように輝かがやいています。その夜よ、町まちの方ほうからは、これまでにないよい音色ねいろが聞こえてきました。その音おとはいつもよりにぎやかそうで、また複雑ふくざつした音色ねいろのように思おもわれました。さよ子はまたそこ

までいつてみたくなりました。

彼女かのじよはまた、その家の窓まどの下したにきて、石いしの上うえに立たつて中なかをのぞいてみました。すると、へやの中なかのようすは、これまでとはすっかり変わかわつていました。もつと美しく、もつときれいに、もつと珍しいめずらなものばかりで飾かざられているばかりでなく、三人にんむすめの娘むすめらのほかに、見み慣なれない年とし若わかい紳士しんしが四、五人にんもいました。それらの男おとこは、楽器がっきを鳴ならしたり、歌うたをうたつたりしました。娘むすめらは、いずれも美しく着飾きかざつて、これまでになくきれいに見みえました。そしてテーブルの上うえには、いろいろの花はなが咲さき乱みだれているばかりでなく、桃もも色いろのランプの外ほかに、緑みどり色いろのランプがともつて、楽らく園えんにきたような感かんじがしたのであります。けれど、ただ一人父親ひとりちちおやの姿すがたが見みえませんでした。これらの若わかい男おとこや、女おんなは、たがいによこえい声うたで歌うたい、また話はなし、また手てを引き合あつて舞踏ぶとうをやつていました。

その夜よさよ子は、家いえに帰かえるときに考かんがえました。どうしてあの人々ひとびとは、ああして楽たのしく遊あそんでばかりいられるのだろう……と、思おもうと、なんとなく、不思議ふしぎでならなかつたのであります。

その後のちというものは、毎夜まいよ、さよ子は町まちの方ほうから聞きこえてくるよい音色ねいろを聞きくたびに、不思議ふしぎな思おもいをせずにはいられなくなりました。

やがて、紅く燃えていたような夏が逝きかけました。つばめは海を渡って、遠い南の永
久夏の国に帰る時分となりました。ある夜、さよ子は二階の欄干に出て、涼しくさえた
星の光を見ながら、町の方から聞こえてくる、よい音色に耳を澄まそうとしたけれど、ど
うしたのか、聞き慣れたその音色は聞こえてこなかった。明くる日もやはり聞こえてこ
なかつた。

さよ子は、いぶかしく思つて、その町にやってきました。すると、その家は堅く閉まっ
て、店頭で売り家の札がはつてありました。ひとり、高く時計台は青く空に突つ立つて、
初秋の星の光が冷たくガラスにさえかえつていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「処女」

1914（大正3）年6月

※表題は底本では、「青《あお》い時計台《とけいだい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い時計台

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>